

七頁参照。

(5) 一九八六年五月十七日、望川村の元幹部三名を中心とする座談会を行なった。その席上での発言。

(6) 閻氏の口述では、九月二十九日であるが、翌日が十月一日の鬼節であったといひ、一九四三年の九月は大月であったことから、又、叔父と従弟をこの時に亡くした李育秀(尉遲村在住)も、旧曆九月二十日と口述している(『故居話童年——李育秀老漢憶趙樹理』李士徳、『山西大学学报』一九八六年第三期増刊)ことから、九月三十日が正しいと思われる。尚、『趙樹理伝』は旧曆十月三十日、『趙樹理年譜』(董大中、山西人民出版社、一九八二年)は旧曆十月二十九日とし、趙広建の「童年与往事」(『山西文学』一九八六年第六期)は冬至の翌日とする。

(7) 趙広建「童年与往事」。注(6)参照。

(8) 趙樹理「回憶歴史、認識自己」(『趙樹理文集』第四卷所収)参照。

調査の援助をして下さった長治市文聯、晋城市文聯、そして沁水県文化局の潘保安氏・苑金榮女士に深く感謝致します。

白朗 試論

一五

平石 淑子

「東北作家」のひとりである女性作家白朗⁽¹⁾は、文革時に受けた心の傷のため、今もなお断固として筆を折ったままである。満州事変を出発点として、抗日戦争、整風運動、反右派闘争、そして文革と激動の時代を生きぬぎ、中国婦女連合の代表として国際舞台を経験もし、新生中国の輝かしい未来を信じた女性の現在としては、それはあまりに痛ましい。彼女の精神分裂症の症状は徐々に好転していると伝えられ、最近相次いで彼女の作品集が出版され始めているのは、心に深い痛手を負った彼女が再び甦えろうとする証であるように思える。現在見ることでできる白朗の作品は多くない。が、その中にすでに十分彼女の思想世界は反映されている。本論は、彼女が筆を折るに至った軌跡を作品の上を探り、その時代のひとつの側面を明らかにしようとするものである。

自身の作品について、白朗は散文集『月夜到黎明』⁽³⁾「前記」の中で、このように述べている。

私は一九三五年に東北を離れてから抗日戦争初期までの時期に発表した散文を、探し集めることのできた一部の文章の中から十数篇を選んで第一輯とした。(中略)これらは多く個人的な角度から個人の印象と心情を表わしたもので

あるが、ある時代の青年のひとつの考え方と行動を示すもので、恐らくその典型性を失なうものではない。同時に、それらの軟弱で無力な描写の中から、東北占領後の敵の暴行と狡猾さ、及び革命の力に対するきちがいじみた迫害について、若干の形跡を尋ねることができるとは思ふ。

(中略) 第二輯は全部で三つの部分に分けられる。一、二のふたつの部分は数年来ヨーロッパと朝鮮を訪問した記録の断片であり、(中略) 第三の部分のほとんどはまだ国内で発表しておらず(一部はソ連及びその他の兄弟国家の刊行物のために書かれたものである)、出版もされていないものである。これらの文章の内容は勿論非常に抽象的且つ味気ないものであるが、それらは偉大な祖国のいくつかの変革をいくらかでも反映しているので、やはりここに収めたのである。

彼女の作品が抗日戦争初期の段階でひとつの転機を迎えたことは確かである。私は白朗自身の分類に基づき、一つの輯を一つの時期として考えたいが、更に東北時代を第一期としてそれらの前に位置づけて、全体を三期に分けようと思う。現在見られる東北時代の作品は「四年間」⁴ただ一編であり、それだけを見て一時期を想定することは無謀ではあるが、「四年間」は明らかにテーマ、問題意識の上で後の作品と一線を画している。

「四年間」は、黛珈という女主人公が恋愛の末に周囲の反対を押し切って結婚するが、結婚後も勉強を続けたいという彼女の希望は夫の家に経済的な余裕がなかったことと、女に学問は

無用といういわゆる旧思想に阻まれてなかなか実現せず、二度の妊娠によってその希望は更に遠のき、もつと不幸なことにはふたりの子供がいずれも誕生後間もなく病死し、ようやく教員の職を見つけて未来への希望を見出したかに見えたが、職場は彼女の理想とはほど遠く、やがて退職した後三度目の妊娠をするが、その子も生まれてすぐ死んでしまうという四年間の虚しい年月を描いた作品であり、作者を取り囲む当時の社会状況の一面を描いているといえる。それが第二期の作品群では、そういう悩み、障害は社会的なものというよりも個人的な問題として捉えられ、第三期はそれらがすべて払拭されて、新しい中国のため、新しい社会のために貢献したいという思いが強く前面に押し出されてくる。

白朗という作家を考える上で最も興味深い時期は、彼女が恐らく作家として最も悩み、また成長したと考えられる第二期であり、この時期の作品を分析し、第三期へつながる道を発見することが、作家白朗の資質を考え、本論の目的とするところに迫るには非常に有効であろうと思われる。第二期とはすでに述べたように、東北を離れ、上海に出て来て以後、抗日戦争初期までをいうが、抗日戦争初期という漠然とした時代区分は、白朗が重慶で作家戦地訪問団に参加した直後に特定でき、作品の上では「老夫妻」⁶までといふことができよう。

この時期に共通するテーマは、専ら東北における日本人侵略者の「暴行と狡猾さ、そして革命の力に対するきちがいじみた迫害」である。そのテーマに特に目新しいところはないが、生

まれ育った父祖の地を捨て、祖国の抵抗の力を信じて上海に流れて来た彼ら東北作家たちの心情を思えば、作品ににじみ出る彼らの切実な思いはひしひしと胸を打つ。

「依瓦魯河畔」で彼女は満州国の宣撫員と満州国に村を売り渡してしまふ村長に対する村人たちと義勇軍の闘いを描き、「一個奇怪的吻」では政治犯として処刑地へ送られる途中脱走を図る若い夫婦を、「輪下」ではハルビンの大水害の折の難民たちと満州国の息のかかる役人たちとの闘争を描いている。更に「生与死」では政治犯を収容する監獄の看守として働く女性に、最初は人道的な立場から、後には明確な民族意識の下に、政治犯の若い女性たちの脱獄を導くようになるさまを描き、「清償」は、ふたりの息子を戦場に送り、彼らが犠牲となった後も更にひとり残った娘を行かせようとして自ら命を断つ、上海事変で両足を失った軍人を描いている。それらの作品に共通する、侵略者に対する無限の憎しみと断固とした抵抗の決意は、抗日戦士の母として慕われる妻と、自分の財産を守ることのみ窮々としていたが、現実に侵略者の残虐非道を目のあたりにし、最後には抗日の隊伍の一員として死んでいく夫を描いた「老夫妻」へと引きつがれていくのであるが、これらの一連の作品を産み出す間に、彼女の意識の上に大きな転機をもたらす出来事がふたつあった。

最初の事件は、一九三七年夏の抗日戦勃発（七・七）と抗日民族統一戦線の結成（八・一三）であった。祖国の抵抗の力を信じて山海関を越えた東北の若者たちが、一様に祖国の現実に

失望を抱いたことは、東北作家たちのいくつかの文章の中に見えるが、白朗は当時の心情を散文「西行散記」にこう記している。

故郷に帰る夢は、もう久しく見ないようにしてきた。一目会うことすらあきらめていた。この絶望は二年來祖国が私に与えたものであった。

だが彼女は続けてこういう。

二年後の今日、祖国は復活し、抗戦の砲火が私の望郷の思いを燃えあがらせた。故郷よ、我々のめぐりあう日が来る。

そして更に武漢や重慶で彼女は人々の抗日に対する固い決意を目のあたりにし、待ちかねた日々の到来を手放しで喜んでいく。

偉大な時代がやって来て、抗戦のラッパが吹き鳴らされた。それは、私の望郷の念を薄れさせ、それは、私の親しき者を思う熱い涙を洗い流した。私は無限の興奮と希望を抱いて、失った七年の自由と山河を抱擁する準備をしている。

（「一封不敢投寄的信」）

抗戦勃発以前に書かれた「依瓦魯河畔」が、抵抗する農民が日本軍の追跡を受け義勇軍と共に撤退して行く場面で結び、また「生与死」が、女主人公が刑場に送られる場面で結んでいるのに対し、上海撤退後に書かれた「清償」では、主人公に、最後の子を戦場に送るため自ら命を断たせることによって、より積極的な形で抗日戦への参加を宣言していることから、彼女が

湧き起こる抗日の氣運を両手を挙げて歓迎し、またそれによって自身の新たな希望を見出していった様子がうかがえる。そして「一封不敢投寄の信」に自ら記している如く、抗日戦勃発後の作品からは、それが小説であるか散文であるかを問わず、東北の影が薄れ、または消滅していることは、彼女が後にたどった運命との関連において注目しておかなければならない。それについては後述する。

だが武漢から重慶に移った彼女の生活は、彼女が理想としていたものとはほど遠く、当地で子供を産んだ彼女は、育児と生活に追われ、⁽¹⁷⁾「憂鬱の火があらゆる情熱を焼き尽くしてしまふ」⁽¹⁸⁾「我脚躑在黑暗的僻巷里」⁽¹⁸⁾と嘆く。

勃（羅烽）⁽¹⁹⁾は私をあの光明の道にいざなう。／子供は私を暗い巷に引き留める。／仕事か子供か、子供か仕事か、今に至るまでまだ決められない。／子供の誕生は、私に無限の煩悶をもたらした！／勃の突然の帰宅は、私に無限の憂鬱をもたらした！
(同上)

最も断ち切り難いのは「母子の情」であり、最も解決が困難なのは家庭の「生活問題」である。

「前方へ」、これは私の二年來の切実な望みであった。だが、正に母子の情が断ち切り難く、生活問題に解決の手立てがなかったために、私の望みは折々に実現のチャンスはあったのだが、私はずっとそのチャンスと手を握ることをしないできた。私はずっと後方に潜み、一日中生活と子供のためにあくせくし、体力は消耗し、心は憂鬱になり、我

々の神聖な抗戦に何も貢献するところがなかった。私は無限の恥かしさとうしろめたさを抱きつつ、敵機の荒れ狂う下でなんとかまだ若い命をながらえ、二年來の成果といえば、ひとりの未來の新中国の幼い主人を養い育てたということであった。

創作生活はもう私にはむかなかった。偉大な時代が必要とするものは血もあり肉もある文章である。だが私は、一中家庭という小さな枠の中にうずくまり、みそだの米だの子供だの他は、外部とは、特に前方とは、殆ど完全に隔絶されていたのである。題材は乏しく、頭は空っぽですっかり鈍くなり、文章を書くことは、私にとってはすでに極端な苦痛を感じるものであった。

(「到前方去」⁽²⁰⁾)

「母子の情」や「生活問題」等、「暗い巷」に引き留めるすべてを切り捨て、彼女は作家戦地訪問団に参加するが、それが第二の転機となる。その成果として書かれた「老夫妻」の中で、彼女は日本人の残虐非道の様を長々とリアルに描き、主人公の張老財に、自らの手で屋敷に火をかけさせ、日本人を焼き殺させる。また最後の部分でも、張老財を打った日本兵を、彼女は許してはおかない。主人を失った鉄かぶとがカラカラと転がる様は凄絶である。前線で直接見聞した人々の抵抗のエネルギーに對する素直な感動は、「戦地日記」(「我們十四個」⁽²¹⁾)に明確に書き留められている。ここで彼女は初めて民衆の力を信じ、敵に對する勝利の確信を抱き得たのであろう。

「老夫妻」を書いた後、白朗は延安に行き、当地で整風運動を体験する。白朗が『『月夜到黎明』前記』で「抗日戦後期」といつているのは、この時期を指すのではないかと思われる。この時期の作品としては、現在散文「開除」があるのだが、この作品も後の彼女の運命を予見させるものとして興味深い。後述する。

解放後、明らかに彼女の作品は変化している。例えば一九五〇年にわずか三十日で書きあげられたという中編小説「為了幸福的明天」は、ひとりの薄幸な少女が爆弾を製造する「革命工場」で働くうちに思想的に目覚め、事故で片腕を失ってもなお党员として強く明るく生きていこうとするさまを描いている。この作品は文革時に「幸福な明日の為に」という題名は今日が幸福でないということか、と批判を受けたというが、明らかにこの作品は当時の党に対する、また党の指導する新中国に対する手放しの讃歌であり、その批判は笑止である。またこの時期の散文には、自らの手で解放を勝ち取った中国民族に対する自信と誇りが、そして自分たちの先達としてのソ連人民への厚い尊敬の念が如実に現わされている。白朗はすでにハルビン時代から夫と共に共産党の地下活動に参加していたが、入党したのは一九四五年、延安においてであった。解放後の彼女の作品の変化は、一旦は絶望を感じさせた祖国が、人民の力によって再び復活したことによって得られた大きな自信と、改めて党员としてその戦列に加わることへの自覚、自負、それらによって裏付けられるものであるといえよう。それらの自信、自負が反右

派闘争を経た後に文革によって一気に崩され、彼女は筆を折った、のであるが、そこに至る過程には彼女の作家としての資質上の問題が深く係わっている。

武漢で、更に重慶で、子供と生活に振り回されて思うような活動ができなかった時代、そういう生活を見つめ、そこに根を下すことも十分「神聖な抗戦」に貢献する創作活動となり得たはずであるのに、彼女は自分が「家庭という小さな枠の中にならずくま」っていると感じ、ひたすら前方へ、「光明の道」へと思いをつのらせて煩悶している。そして、幼な児の乳を断ち、老いた姑と子を空襲にさらされる重慶に残してまで、また自らの命の危険を冒してまで前線へ赴こうとするのである。彼女は目前の闘争を常に直視しようとしていたが、彼女にとって意味のある闘争は、党にとって意味のある闘争と同じでなければならず、個人の喜びも悲しみも公の、全体の闘争とどれだけ一体感を持てるかによって決められてくるのであった。白朗の作品の多くは女性が主人公となり、また主人公に準じる重要な位置を占めているのであるが、その女性たちの形象を追うことによって、それは証明することができる。

彼女は作品の中で、しばしば夫婦の愛情の問題を取り上げている。例えば「四年間」。ここに描かれたのは旧思想に洗脳された人々や社会の中で精一杯の抵抗をしようとする新しい女性の姿であり、夫の影は非常に薄く、彼女の消極的な理解者として、旧思想の代表者としての実母と妻の板挟みとなって悩む存在として描かれている。夫は彼女に対しては無限に優しいが、

経済的な問題と旧思想の前には殆ど無力なのである。し省出身の黛珈がハルビンで結婚すること、彼女の父親は早くになくなっていて、姑と同居していること、何度も子供をなくしていることなど、白朗自身の経歴と重なることは多いが、例えば「淪陷前後」⁽²⁵⁾等の散文を見れば、この作品が彼女と羅烽との直接の關係の反映ではないということがわかる。「淪陷前後」は、九・一八直後、彼女が当時すでに黨員であった夫の羅烽に導かれて地下活動に加わっていく過程を記しているが、そこには自分を正しい道に導き出してくれた夫への絶対的な信頼と尊敬がにじみ出ている。白朗は一九三三年から、党の命を受けてハルビンへ「国際協報」に就職し、翌年には文芸副刊の主編として活躍するようになる。⁽²⁶⁾当時の彼女の主要な関心はすでに東北の解放、民族の解放、侵略者に対する抵抗にあったはずであるが、「四年間」の中にはそのような雰囲気は全くうかがえない。恐らく当時、夫の活動を助けるべく、「国際協報」の女性編集者として「女だてらに」精力的に活動する彼女に対する周囲の風当たりは相当のものであり、まずそれを超えるところから始めなければならなかったからであろう。またそれは当時目覚めた女性たちの前に共通して立ちほだかる問題であったのだろう。それが上海に来てから見事にふっきれたように見えるのは、上海がハルビンに比べてはるかに開かれた都会であったからかもしれない。そこで恐らく白朗は誰に遠慮することもなく同志として夫を見、また同志として夫と歩めることに誇りと喜びを感じただろう。「一個奇怪的吻」で、列車からの脱走には成功

したものの、負傷して進退窮まった妻に、彼女はこういわせている。「私の他に三千余万の受難の同胞があなたを敬愛し、あなたを必要とし、あなたを待っているのよ、行きなさい！」夫を川向こうの自分の生家に行かせた後、彼女は入水するのであるが、実は彼女の生家と村はすでに廃墟と化し、彼女が身を投げた直後、夫は再びそこに戻って来る。物語はそこで終わるが、その後彼は妻が地面に書き残した文字を見るはずである。

私が死んでも、誰も私の為に涙を流すことはない。安らかに死に赴こうとする時、私の愛する人が、民族の為に犠牲となる大道に向かって歩いて行くのが見える。まるで彼の血しぶきが見えるようだ。私は喜んで死んでいこう！

ここに描かれたふたりの愛の表現は大胆でもあり、また歯の浮くようなものであるが、この作品は白朗の夫に対する心情の吐露であり、自分たちの目前の闘争に、夫が欠くことのできない人物であるという確信を持ってこそ、その夫のために自分は命を投げ出すことも辞さない、という彼女自身の激しい決意を代弁するものである。この作品で、やり残した仕事に心を残す夫に脱走を決意させるのは妻である。

また「輪下」の陸雄嫂は、逮捕された夫の護送車の前でもみ合い、はずみで車の前に子供と共に倒れ込むが、彼女はそのままそこを動こうとせず、ついに動き出した車にひき殺されてしまう。白朗にとって夫婦とは、同じ闘争の場における同志であり、一方が倒れば、もう一方がその屍を越えて歩いて行くものでなければならなかった。教育も知識もない難民の陸雄嫂で

あるが、彼女の取った行動は、夫に対する無言の、そして最大の敬意と賛同の表現であり、夫を捉えようとする者たちへの命を賭けた強い抗議の姿勢であった。それは周囲でそれを見ていたであろう多くの人々に大きな衝撃を与えたに違いない、思いがけなくも結果として夫の行動を正当化し、ゆるぎないものとする効果を生んだ。

彼女のそういった夫婦観は、「老夫妻」でより明確なものとなる。この作品のテーマは、先祖代々の財産を自分の命のように愛する守銭奴張老財が抵抗の思想に目覚めていく過程を描くことにあるが、題名にもあるように、その伏線として、そういう夫を憎みながらも一方で彼の覚醒に期待する妻、張老太太が描かれている。財産を守ろうとする一念で妻と子供を家から追い出してしまった張老財であったが、日本兵の存在を知らせようとして凶弾に倒れた最期の時に彼は張老太太に会いたいと望み、また張老太太も彼のために山道を急ぎ、彼の手を握り、涙を流してその最期を見取るのである。全く生き方の違う夫婦であるが、張老財は財産に淡泊な妻に何か人間的な温みを感じ、忘れられずにいるし、一方張老太太は夫の中に隠されている人間性の回復を待っており、その人間性の回復とは即ち抵抗への覚醒なのである。自分の屋敷を焼いて山中に逃れた夫を迎えた張老太太は、再び彼と一緒に暮らそうとする。この作品で白朗は、夫婦の愛情とは、目指す道が正しくひとつである時、初めて完全なものになることをより明らかに主張するのである。

解放後に書かれた「為了幸福的明天」で彼女のその思想は更

に発展する。主人公の玉梅は、工場の共産党総支部書記黎強に出会い、身体の障害を克服した彼の党员としての姿勢に大きな感動と励ましを受けると同時に、彼に対して次第に淡い恋心を抱くようになる。黎強も彼女の気持ちに気づくが、その時彼はすでに婚約しており、結局彼は職場の同僚で玉梅の良き理解者であり指導者でもあった王英と結ばれる。玉梅はこの理想のカップルの誕生を心から喜び、片腕切断という不幸に見舞われ、将来に対し、結婚に対しても深い絶望感にさいなまれていた時、彼らの結婚は彼女に失恋の痛手を与えるどころか、同じ障害者としての黎強がすばらしい伴侶を得たことを知って却て未来への明るい希望を抱くのである。玉梅の恋愛がテーマではないが、玉梅の心情はたいへん不自然である。この作品が書かれた一九五〇年当時、東北でこれと類似の事件が話題になったと聞く。あるいは玉梅の心情についても事実に基づくのかもしれないが、事実であるとすれば、それを不自然に感じない作者の側にむしろ不自然さを感じる。それが事実であるにせよないにせよ、玉梅に黎強への思いをこんなふうに明るくさっぱりと断ち切らせたのは、恐らく作者の側に模範的な闘争者である黎強は玉梅に比してより完成された闘争者である王英とこそ結ばれるべきであるという意識が強く働いていたからに他ならない。

白朗は自分の弱さや迷いを作品のテーマとすることを好まなかったようである。彼女がそれらを作品上に全く露呈しないのではないが、その場合その大部分がすでに解決され、また克服された後に書かれていることに注目したい。そこに彼女の文学

に対する姿勢が見える。即ち文学作品は、あくまでも正しい大道を歩むための指標でなければならず、個人的な悩みや迷い、弱さはそれ自体作品のテーマにはなり得ないものであった。だから彼女は武漢及び重慶における「暗い巷」の日々を書けなかったのである。そういう彼女を支えるものが、党に対する絶対的な信頼であったことは疑いもない。彼女のその絶対的な信頼に陰を落とす事件が起こった。延安における整風運動である。この時期彼女は最初の精神分裂病の症状を現わしたという。散文「開除」は、作者が、保長になって二年のまるで子をはらんだ豚のような太鼓腹をした陳保長から聞いた話を、全く何の感想も交えずに記録したものである。ある時、合川にいる陳保長の弟から手紙がきて、前線に連れて行かれるという。保長は慌てて飛んで行き、弟に説教して士気を鼓舞するかと思えば、同郷の上官のところへ行って弟を任務からはずしてくれるよう頼み、上官がよい返事をくれないのでしかたなく百元を投じる。次の朝、弟は上官に秘かに指示されたとおりの仮病を装うが、ばれて四十叩きに遭う。一時はだまされたと思いかつとするが、その直後上官から除隊を命じられ、陳保長はそれを「救った」と得意気に話すのである。この話は整風運動と反右派闘争で槍玉に挙げられた王実味の「野百合花」に先立ち、その出現を予見するものといえよう。それがなぜ当時問題にされず、『月夜到黎明』にも収録を許されたのか、またその後の批判の中でそれが問題にされることがあったのかどうか、残念ながら資料がない。

続く反右派闘争では、彼女が何かを発言した主張したという資料は今のところない。が前述の「開除」という作品から見て、白朗が闘争の標的のひとつとされた「還是雜文時代」の作者羅烽と運命を共にしたことは明白である。『為了幸福的明天』重版前言²⁸の中で、白朗はこの小説が一九五七年に作者と共に不幸にも「棚からおろされ」、その後二十三年間世に出ることはなかったと述べている。羅烽と共に右派分子とされた白朗は遼寧省阜新の炭坑に労働改造に追いやられ、その後一九六二年に右派分子の帽子は取られるものの、「右派」というレッテルはかなり根強くつきまとったといわれ、更に追い打ちをかけるように一九六六年、文革の渦中で他の多くの作家と同様にいわれない批判を受けなければならなかったのである。当時彼女に与えられたレッテルは、「大右派」、「黒線人物」、「資産階級反動學術權威」といったものであり、「為了幸福的明天」は「大毒草」であると決めつけられた。また「白」は反動の色であるのに、なぜ「白朗」と名乗るのかと詰め寄られもした。それに対し、白朗は毅然として「白は純潔です。私は白が好きです。」と答えたという。その後強制労働に送られるが、当地で精神分裂病が再発し、物を投げ、シーツを引き裂き、名指しで「大人物」を罵り、ついに北京の娘の元で療養を命じられる。一九七九年に名誉回復され、車椅子で全国第四次文代会に参加、間もなく作家協会遼寧分会から全国作家協会に移っているが、一九六四年に書いた「温泉」という小説（未見）を最後に、現在に至るまでまだ彼女が再び筆を持ったという消息を聞

かない。延安整風に始まって文革に至る一連の政治的、社会的動乱が、彼女のそれまでの自信や信頼のすべてを失わせ、価値観のすべてをくつがえしてしまったことは確かである。

だが彼女の損なわれた心は確実に回復している。最近次々と彼女の作品集が編まれているのがそのひとつの証である。『為了幸福的明天』重版前言に彼女はどのように述べている。

今日国に災いし民を損なつた林彪、「四人組」は粉碎された。党の三中全会は、社会主義建設のそれぞれの路線において「乱れを取り去り正道に戻す」英明な政策を提出した。冷えきつた酷暑の日々は終わり、今は暖かい春の風と恵み深い春の雨、万物がよみがえる季節である。私のような齢七十を経た朽ち果てたような老木にも、党の雨は注いでくれる。この極めて平凡な本も、ついに再び太陽を見ることができた。これは私が生きている間には思ってもみなかったことである。

原本は手を入れることをせず、二十三年前の本来の面目を保っている。同志の批評を期待する。今私は党の看護の下で、林彪、「四人組」から被つた心身の傷を治療している。一日も早く回復し、再び筆を取って社会主義現代化のために心を奮い立たせたいと思う。

これは白朗の事実上の復活宣言であり、また二十三年前に批判を受けた作品をそのままの形で敢て再び世に問おうとするところに彼女の現在の社会に対する挑戦を見る。一旦亀裂を生じた党に対する信頼関係は、果たして林彪、四人組が打倒された

ことでまた再び元に復することが可能なのであろうか。

白朗は現在もなお党员であり、かつて中国婦女連合の代表として政治的活動も経験した人であるが、彼女の入党は意外に遅く、一九四五年、前出の「開除」が書かれた四年後である。すでに述べたようにハルビン時代、彼女の行動は羅烽を通じ、すべて党の指示の下にあったはずであるのに、なぜ彼女は当時入党しなかったのだろうか。更に彼女は延安で、王実味に先立って延安の暗黒面に気づいてしまっている。彼女が当地で最初の精神分裂症を発病したことはあながちそのことと無縁ではないようにすら思える。その後、一九四五年の入党までに彼女の不安なり失望なりを解決し、党への信頼を回復する大きな出来事があったとは考えにくい。すでに私は彼女の作品について、抗日戦勃発後、東北の影が薄れ、または消滅している、と指摘したが、そのことと彼女の党に対する心情の変化とが时期的に重なってくることに注目すべきである。彼女が中国共産党に期待したのは、つきつめれば故郷である東北の解放というただ一点であり、全面抗戦が開戦されるようになると、彼女はその中で作品の上ではそれに合わせて自己を変えていったように見受けられるが、心の奥深い部分では闘争のターゲットが広がりすぎ、心情的に東北から離れられずにいる自分の身の置き所を見失いそうになっていたのかもしれない。だからこそなおさら意識的に、題材として東北を避けるようになったのだともいえる。東北解放を前提に、一途に信頼し、大袈裟でなく自分の生涯のすべてを賭けてきた中国共産党の闘争のターゲットが、全

面抗戦後は東北から離れたように見え、また事実離れたのである。初期の段階では、彼女は悲願ともいうべき東北解放のために党を活動の拠り所にしていたにすぎない。だから入党の意志も必然性もなかった。だがその単なる拠り所であった党の活動に次第にのめりこみ、気づいた時には党の存在は自分の生活のすべてを支配するほど大きな存在となっていた。しかしながら彼女は東北解放という太い柱になお強く支えられてきたのであり、その柱が失われてしまうと、にわかにかの安定を失った。更に延安で、自分の理想とははるかにかけ離れた現実を見してしまったのである。その中で彼女が遅ればせに入党を決意したのは、黨員となることで党と自分との間に新たな関係が生じることを期待し、また東北解放に代わる支えを希求したのであろう。だが彼女と同時期、共に活躍した東北作家がみな同じような道を歩んだのではない。彼らの中で作家として活動を始める以前から黨員であったのは羅烽と舒群のみであり、またその意²⁹り、蕭紅は早逝したがその時まで黨員ではなく、またその意志もなかった。また蕭軍は現在も黨員ではなく、最近の発言からむしろ黨員となることを意識的に拒否しているように見受けられる³⁰。

黨員となった後、彼女は更に反右派闘争並びに文革の洗礼を受けなければならなかった。その時代の荒波の中では、羅烽や蕭軍も等しくもみしだかれなければならなかったが、二十年代からの生粋の黨員である羅烽や、非黨員である蕭軍に比して、白朗の受けた精神的打撃は格段に大きかったはずである。そし

てまた、彼女が自分の悩み、苦しみを作品のテーマにできる作家であったなら、その痛手もまたちがった発展を見たかもしれない。彼女は作品にあまりに完璧なものを求めすぎ、かえって視野をせばめ、また心の逃げ道を失っていったようである。

「為了幸福的明天」で玉梅を黎強と結婚させなかったのは、玉梅に片腕に象徴されるところのすべてを失わせることによつて、より頑強な闘争者としての成長を期待したためであろう。同様のパターンは、「一個奇怪的吻」の夫に、「清償」のひとり娘に、また「輪下」の陸雄に見られる。それは、生まれ育った土地とそこに付随するすべてを捨てて祖国に希望を託した「東北作家」としての彼女の心情につながるものがある。すべてを失うことによつて新たな闘争の決意がより決然と産み出されるのであれば、文革によつてこれまでの自信や信頼のすべてを失ってしまった白朗に対してもそれを期待したい。もし白朗が再び甦えるならば、その第一作で彼女が現在の彼女をとりまく社会的、政治的環境をどのように位置づけるか、過去の体験をどのように清算し未来への希望につないでいくのかが問題となるはずである。

注

(1) 一九一二年八月二日沈陽に生まれる。本名は劉東蘭。

沈陽の著名な漢方医であった祖父劉紫(子)揚は厳格な封建教義を以て孫に対したという。祖父は蒙古王の病気を治して以後、黒竜江省督軍の軍医に抜てきされるが、張作霖

の死後失業、家は没落し、彼の死後、白朗と母親はチチハルで母方の従兄の羅烽一家と同居するようになる。白朗の父親は読書人であったが役人にはならず、家業を継いで漢方医となったが、祖父に先立って白朗が十一歳の時に死ぬ。母親は貧しい家の出の善良な婦人で、常に貧しい人々に慈悲の心を持ち、施しを忘れなかった。この母親の形象は白朗の「老夫妻」(注6参照)の張老太太に生きている。白朗には姉と弟がおり、共に肺病を病んで、家が没落した後、治療する金もないまま死んだというが、白朗の後の散文「一封不敢投寄的信」等を見ると、弟は存命であるように見える。一九二九年ハルビンで羅烽と結婚。これはもともと姉が結婚するはずであったのが早死にしたため、母親が白朗をめあわせたのだという。九・一八(満州事変)後抗日地下活動に参加し、〈国際協報〉文芸副刊主編等として活躍するが、身の危険を感じるようになり、一九三五年末、夫と共に上海に逃れる。抗日戦争期には上海文芸界戦地服務団、作家戦地訪問団等に参加し、一九四五年入党。解放戦争期には従軍記者として冀東地区を転戦、解放後は国際婦人連合調査団の一員として朝鮮の戦場を訪問する等、朝鮮戦争に関心を示すと共に婦人運動に深く係わり、ソフィアの国際婦人連合執行委員会(五一)、コペンハーゲンの世界婦人大会、ヘルシンキのフィンランド婦人大会(共に五三)等に参加する。白朗の略歴については主に『中国現代女作家』(八三 黒竜江人民出版社)及び「白朗

的生平和創作道路」(陳震文 〈東北現代文学史料〉五八 遼寧社会科学院文学研究所)を参考とした。他に『中国文学家辞典』現代第一分冊(七九 四川人民出版社)がある。

(2) 『為了幸福的明天』(八一 人民文学出版社)、『白朗文集』五「愛的召喚」(八三 春風文芸出版社)、『白朗文集』二「中篇小説集」(八五 春風文芸出版社)。

(3) 『月夜到黎明』五五・一〇 作家出版社。「前記」の執筆は五四年末。

(4) 三四・六。『白朗文集』二所収。

(5) 一九三八年に重慶で成立した中華全国文芸界抗敵協会により、团长王礼錫他十二名により組織される。一九三九年六月十八日出発、中条山を中心に前線を訪問するが、八月二十六日、王礼錫が病死、九月初め、医師の勧告に従って白朗も団を離れ、重慶へ戻る。

(6) 四〇・三・八。中華全国文芸界抗敵協会の編集により、作家戦地訪問団叢書として中国文化服務社より出版される。「戦地日記」八月十一日には張老財のモデルが、八月二十二日には「義勇軍の母」張老太太のエピソードが見える。「老夫妻」はこのふたつの実話を合わせて創作されたものである。『白朗文集』二所収。

(7) 同時期行動を共にした人々として他に蕭軍・蕭紅夫婦、舒群等がいる。

(8) 三六・七・一、〈文学界〉一一三(三六・八)原載、

『依瓦魯河畔』(四九・八 上海文化生活出版社)・『中国新文学大系統編』所収。

(9) 『依瓦魯河畔』・『中国新文学大系統編』所収。

(10) 同(9)。

(11) 〈中流〉一一八(三七・二)原載、所収は同(9)。

(12) この主人公の形象は、ゴリキキーの「母」を連想させる。

九・一八後、白朗は羅烽の啓蒙を受けて多くの革命文学作品を読んだ。その中にはいくつかのソ連の新しい文学作品が含まれ、例えば「母」の他にも、リベデンスキーの「一週間」、セラフィモヴィチの「鉄の流れ」、ファヂェエフの「毀滅」等がある。特に「母」の主人公ニエロヴナには新鮮な深い感動を覚えたという(「白朗の生平和創作道路」)。

(13) 〈戦地〉一(三八・三・二〇)原載、『第一年』(三八・九 誼社編)所収。

(14) 例えば、蕭軍「好美麗的地方」(三四・八・一 青島。『綠葉底故事』三六・一二 上海文化生活出版社 所収)、

舒群「九月的夜記」(〈中流〉一一一 三六・九)、羅烽「五年了!!!」(〈中流〉一一二 三六・九)。

(15) 三七・八・一三後 於武漢。『月夜到黎明』所収。

(16) 三八・五 於武漢。『月夜到黎明』所収。

(17) 白朗は一九三一年から三五年までの間に三人の子供を産み、いずれも早くになくしている(「白朗の生平和創作

道路」)。また、抗日戦勃発後の上海で一才に満たない子供をなくしているという(「中国現代女作家」)。ここで生まれた子供は息子の傅英で、後延安で第二子白瑩(女)を産んでいるが、ふたりとも健在である。後に述べるように彼女が「最も断ち切り難いのは「母子の情」と述べているのには、何人もの子供を幼くして失っているという彼女自身の不幸な経歴が背後にあることも考慮しなければならぬ。

(18) 三八初。『月夜到黎明』所収。

(19) 一九〇九年遼寧省沈陽縣蘇家屯に生まれる。中学卒業後、ハルビンで呼海鐵路伝習所に入所し、抗日地下闘争に係わるようになる。一九二九年入党。一九三七年冬、実母と白朗、生まれたばかりの息子を武漢に残し、単身臨汾へ行き、従軍。ここで「突然の帰宅」というのは彼が西部戦線から戻ったことをいう。またここでいう「光明の道」とは、作家戦地訪問団に参加することをいうのであろう。

(20) 三九・六。「戦地日記(我們十四個)」の序文となる。

『月夜到黎明』・『白朗文集』二所収。

(21) 注(20)参照。

(22) 四一・五・二〇 延安。『月夜到黎明』所収。

(23) 五〇・一〇・一〇、五〇・一二・一五修改、五三・五第二次修改 於沈陽。五一・七(北京人民文学出版社)第一版、五二・六 第四版、八一重版(前言を付す)。邦訳がある。鮑秀蘭訳『幸福な明日のために』(五二・八

沈陽・民主新聞社。

(24) 当時の彼らの活動については拙論「ハルビンの抗日文芸運動緒論—金劍嘯の活動を中心に—」(人間文化研究年報)九、八五・四。お茶の水女子大学人間文化研究科)を参照されたい。

(25) 三五 在上海。『東北作家近作集』(三六・九 上海生活書店。〈光明〉一—七付録)・『月夜到黎明』・『中国新文学大系統編』所収。

(26) 「ハルビンの抗日文芸運動緒論」参照。

(27) 三・一〇。〈解放日報〉(四二・五・二〇)原載、〈文芸報〉二(五八・一・二六)・『再批判』(五八・六 作家出版社)所収。

(28) 八〇・二・二七 於北京友誼医院(作者白朗口述、女兒白瑩筆録)。人民文学出版社版(八一)所収。

(29) 舒群は、九・一八後抗日義勇軍に参加した後、一九三二年三月、第三インターナショナルの情報員となり、九月、入党している。

(30) 一九四二年香港で客死。

(31) 一九八五年来日の折、都立大学での座談会の席等で、なぜ覚員にならなかったのかという質問に対し、入党しなくても党に対する忠誠心は変わらないと発言している。

「作家蕭軍に聞く」(季刊〈鄒其山〉一〇 八五・冬)参照。

芭蕉における杜甫

伊古田 陽子

一 はじめに

芭蕉が生前、杜甫の詩を愛好していたことは、種々の著作の中から窺える。例えば、「李杜が心酒を嘗て」(天和元年、一六八一、五月、『虚栗』抜)、「唯李・杜・定家・西行等の御作等、御手本と御意得可被成候。」(貞享二年、一六八五、正月廿八日附の半残宛書簡)、「はるかに宅家の骨をさぐり、西行の筋をたどり、樂天が腸をあらひ、杜子が方寸に入(る)やから、わづかに都鄙かぞへて十ヲの指ふさず。」(元禄五年、一六九二、二月十八日附の曲水宛書簡)などである。

芭蕉にとって杜甫の詩がいかなる意味を持ったのか、また杜甫の詩をどのように享受していったのかについて、本稿ではいくつかの作品を比較しつつ、その影響関係を考察することで明らかにしていきたい。それによって芭蕉における杜甫の存在が浮き彫りにされると思うのである。

二 芭蕉の見た杜甫のテキスト

芭蕉は、どのテキストによって杜甫の詩を知り得たのか。黒川洋一氏は、